ユスティニアヌス建築に関するゼーデルマイヤの研究

ゼーデルマイヤの教会堂建築論 2

SEDLMAYR'S STUDY ON JUSTINIAN ARCHITECTURE

Sedlmayr's theory of church architecture 2

黒岩俊介*

Shunsuke KUROIWA

In this paper, forming part of a comprehensive study on Hans Sedlmayr's theory of occidental church architecture in its historical development from its origins to Gothic, the views and ideas of this art historian as regards the "Justinian architecture" are discussed in an analytical reading of his study: "Das erste Mittelalterliche Architektursystem". The "overlapping baldachin" of this architecture that he postulates as its essential element is considered to be one of the most distinctive characters of the Medieval architecture; since it contributes to the conservation of the antique columns and their integration into another more comprehensive order, i.e. hierarchy, which sanctions a new non-classical architectural principle.

Keywords : Justinianus, Baldachin, Wall, Church, Hagia Sophia, Sedlmayr
ユスティニアヌス、バルダキン、壁、教会堂、ハギア・ソフィア、ゼーデルマイヤ

1. はじめに

ゼーデルマイヤの西欧キリスト教教会堂に関する建築論を考察する研究¹⁾の一環として、本稿では、ヨーロッパにおいて古代と中世の転換期をなすユスティニアヌス建築²⁾に関してかれが 1933 年に発表した『最初の中世建築システム』³⁾を検討する。ただしここでは、のちにビザンティン建築としての展開をも含めたユスティニアヌス建築そのものというよりむしろ、西ヨーロッパのロマネスクとゴシックの建築へと連なる建築史のなかで、かれの措定する「包摂的バルダキン」の生成と展開という文脈においてユスティニアヌス建築が果たした役割に関するかれの建築論を検討することに主眼をおく。すなわち、かれが当該建築にたいして試み、のちに西欧中世の教会堂建築にたいしても試みることになる教会堂建築の歴史と芸術的展開に関するかれの観点や解釈にとくに注目しながら上記の論文を読み解くことを最優先する⁴⁾。したがって、ここでの解明は西欧建築の文脈のなかでさらなる究明を必要とするものである。

2. 古代から中世までの壁造形の諸型

かれはまず、図 1⁵⁾のように、壁造形(Wandgestaltung)をいくつかの類型に分類する。これらの壁造形の型(タイプ)は、「建築家の表象においては、個々の芸術作品に先立って(vor)⁶⁾直接的に具体的に目に見えるもの⁷⁾として、しかしまだ変形されうる構成要素として与えられている。そして建築構成的制作(Produktion)の『主導モチーフ』として他のモチーフとともに、ひとつの特定の建築構成的シ

ステムの支配を代表している(repräsentieren)』(81)という。いれかえると、建築の制作や設計において、壁造形の型は全体の造形に時間的に先立つだけでなく、それが前提とされることによってその型によるシステム全体をすでに表わしているという意味で「代表している」ということである。そういう意味において、このような型は「主導モチーフ」、すなわち建築の設計を主導する「動機」、設計の契機と考えられている。

1型 ヘレニズムの壁型:ヘレニズムの壁型は「円柱の幕で覆われた境界面(Grenzfläche)」であり、「前方の区域(Zone)には丸彫りの躯体があるだけで、それらの躯体は深い陰に沈む空間域(Raumzone)で裏打ちされた裏箔(Folie)⁸⁾を背景に姿を現わす。そして事実上の境界となる二次壁はこの空間域の陰に吸収される」⁹⁾。(81)

2型 盛期ローマの壁型:「盛期ローマの壁型では、オーダー円柱¹⁰⁾は壁のなかにはめ込まれた半円柱または半脚柱(Halbpfeiler)として壁と合体して一体的な丸彫り的高浮彫りになる。空間は、この浮彫りのアーチ開口のなかで、オーダー円柱のあいだにだけ、いわば圧縮されて現われる。二次壁はこれらのぼっかり口を開けた洞穴の暗闇に呑みこまれる」。(81)

3a型壁型:「トラヤヌス帝期とハドリアヌス帝期にとりわけ顕著になるが、おそらく1世紀にはすでに、盛期ローマ型に対する反動として、個々の円柱が丸彫り的な個体として壁から際立たされるような壁システムが支配的となる。しかしこれらの円柱は、相互に結合されて前方の円柱列になるのではなく、(...)それぞ

* 広島工業大学環境学部環境デザイン学科 助教授・工博

Assoc. Prof., Dept. of Environmental Design, Faculty of Environmental Studies, Hiroshima Institute of Technology, Dr. Eng.

れの円柱の柱身の上に張り出してめぐらされるエンタブラチュア(Gebälk)によって壁にひき戻される」¹¹(82)。

3b型壁型:「ほぼ同時期にヘレニズムの東方において、純粋なヘレニズムの一体的な円柱列が壊れて、二つの(まれにそれ以上の)円柱断片だけが壁の前に残るような壁システムが支配的になる」。「この“Prostasen”システムのみごとな例は、ミレトスのニュンファエウムの舞台壁である」。(82)

いずれにしても、3a型と3b型の双方に共通なのは、「後方の『地の壁』(“Grundwand”)が第一義的なものだ」(82)ということである¹²。

3c型壁型:「壁が密接に重ね合わされた二つの面に分解され、そのうちの前方の面が古代的オーダーの円柱をそれ自体のなかに含む」¹³。「この『前ロマネスク的な』壁の捉え方は散発的にしかみられないようである」。(84)

4型 キリスト教古代の壁型:「キリスト教古代の理想壁(Wandideal)」では、「前方の層は純粋な面¹⁴」である。「オーダー円柱は壁のなかへとり戻される¹⁵。オーダー円柱は、あるいてヘレニズムにおけるように、下は暗く、上は明るい一体的な空間域で裏地をつけられる。あるいは、第一義的な壁面の非分離的な部分に変えられる。つまり、アーケードの脚柱(Pfeiler)は壁の残余部分だということである」。(81-82)

5型 包摂的壁型:この壁型では、「前方の壁が互いに明確に分離された二つの構成要素からなり、(...)図1-4a型のアーケード列の各アーケードの下に、それより小さい図1-4型のアーケード列がはめ込まれる」。「壁のなかで前方、もしくは後方に段差をつけられることによって、二つの構成要素が互いに独立するものだというのが、すなわち第二の薄いアーケード壁が第一のアーケード壁の『充填』だということが、きわめて明瞭に示される。二つの構成要素は等価ではない。下のアーチ壁をとり去っても、大アーケードは無傷のままである。無傷であるというのは、たんにみずから直立の姿勢を保つ(Sich-allein-Auf-rechthalten)という技術的意味においてだけでなく、残された部分が損なわれず完全であるという審美的意味においても、そうなのである。しかし逆に、第一義的な構成要素をとり去ると、残された部分は意味のない断片とならざるをえない」。(84-85)

このように、「図1-5にみられる構造の新しさは、第一義的な構成要素と二次的な構成要素へ、すなわち包摂する要素と包摂される要素へ分解することである」。「ゼーデルマイヤはこのような「構造型」を、主要構成部分の形態で代表させて、「包摂的形態」と命名する。「そのような壁の直接的印象において、壁の一体性を構築する構成要素の二元性(Dualität)はごく自然に強烈にあらわれる。つまり、包摂される形態が『より薄く』みえるのである」。「古典的な例」はサン・ヴィターレのナルテックスである。かれは、「この形態が——いうまでもなく19世紀における中世の諸形態の模倣を別として——中世以後の建築には二度と現われないという、まさにそのことがその中世の本質を特徴的に示している」とみなす。(85-86)

3. 天井—上方の遮蔽とバルダキン

古代ギリシャに端を発する「古代の建築には、ユスティニアヌス帝の画期的時代まで、上方の閉じられた空間をつくるのに、大きく分けて、二つの方式がある」¹⁶。

Iの方式:第一の方式の基本特性は、「まず垂直の壁の境界が与えられ、つぎに上方に、すでに壁だけでつくられた内部空間の遮蔽(Abschluß)が与えられる」(88)。「上方の遮蔽はあとで付加された二次形態である」。(87)

Ia方式:この上方の遮蔽(天井や屋根)が「付加的におかれる蓋(Deckel)のように壁の上ののって『静止している』。こうして、ギリシャの神殿の上に石の梁天井が、ヘレニズムの円柱の上や古代キリスト教のバシリカの上に垂木屋根が

横たわっている」。ゼーデルマイヤによると、初期キリスト教のバシリカを「屋根で覆われた中庭」¹⁷とするリーグルの記述は壁と屋根(天井)のこのような関係を言い得ているという。「分離された一体的な殻(Schale)として円筒形の壁の上ののっている」パンテオンのクーボラ¹⁸も、「曲面の天井として身廊壁にのっている」半円筒ヴォールトも、この方式の屋根形式とみなされる。(87-88)

Ib方式:「天井原理」のいまいとつの可能性においては、「上方の遮蔽は、それ自体で存立する空間を境界づける壁の上方で、あるいは壁のあいだで、見るからに自由に浮遊する」。たとえば「ヴィラ・アドリアーナのピアッツァ・ドーロの大広間の球形ドーム¹⁹は——開き広げられた八本の骨でできた傘のように——そのペンデンティヴの八つの尖った先端だけがヘレニズム風の円柱列に触れており、その円柱列が八つの側面によって空間を境界づける」²⁰。ゼーデルマイヤがここで注目するのは、「『浮遊』を意図することが、たんに古代にも知られていたというだけではなく、下方に確固として存在する軀体世界(Körperwelt)との対比において、それが意図されている」ことである。ここでは、「たとえばクーボラの浮遊のいくぶんかがすでに²¹壁のなかに存在するようなユスティニアヌス帝期や中世ビザンティンの建築におけるよりもはるかに一義的な(eindeutig)対比によって浮遊が意図されている」。(88)

IIの方式:第二の方式(図3-11, XI参照)は、「全面を閉じられた内部空間を構成する。ここでも互いに独立した二つの構成要素が等価に並置されて与えられる。すなわち、壁体による壁の垂直的境界と、それらの壁のあいだにはめ込まれる単独または複数のバルダキン²²という二つの構成要素である。バルダキンの円柱は、審美的印象においては、ヴォールトを支持する。ヴォールトはたいてい格間にされるが、バルダキン支柱からつよく際立たせられる。壁のあいだに立つバルダキン全体も同じくらいにつよく壁から分離される」。二つの構成要素そのものが異なるだけでなく、第一の方式ではそれらが主[第一義]と副[二次]という従属的關係にあるのに対して、この第二の方式ではそれらは分離されて独立しており、並列的關係にある。したがって、「外套壁(Wandmantel)を損なうことなく、バルダキンを——観念的に——上方へ抜きとることができるであろう。極端な場合には、あたかもまずバルダキンがあつて、付加的にはじめて、まわりを囲む空間にたいして仕切り壁で仕切られたかのような印象を与えることがある²³」。ゼーデルマイヤは、このような内部空間をつくる原理を「バルダキン原理」とよぶ。(88-89)

4. ユスティニアヌス帝期のバルダキン

ユスティニアヌス帝期のバルダキン・システムは、『ユスティニアヌス帝期の』、『中世の』新しい壁型が古代の壁型と峻別されるように、それまでの古代のバルダキン・システムとは峻別されるという。(92)

「ユスティニアヌス帝期のバルダキン・システムにおいては、バルダキン・ヴォールトの支柱は、壁の前に独立してではなく、壁のなかに立っており、壁の部分であると同時にバルダキンの部分でもある。壁は、バルダキンの周囲を外套のように包むもの(Ummantelung)としてバルダキン円柱の背景とされるのではなく、バルダキン支柱のあいだに充填としてとり込まれる。外套壁とバルダキン相互間の独立性は停止する。バルダキンだけが——観念的に——それ自体で存立することができるし、時には実際に廃墟において、充填する壁が抜け落ちているのに、バルダキン支柱だけが残っていることがある²⁴。バルダキンを壁からとり去ると、残る壁の切断部は断片であり、無意味である」。(92-93)

ゼーデルマイヤはここに盛期古代の壁の捉え方からの「転換」を見据える。すなわち、「壁が『天井』や浮遊する『傘』やバルダキンによってあとから補足して(nachträglich)ようやくその上方を閉じられるような空間を構成する第一義的な要素なのではなく、バルダキンが空間形成的な第一義的な要素(das primäre,

raumschaffende Element)(傍点筆者)なのであり、それがその開いた側面を壁によってあとから補足的に充填され、全面的に閉じたひとつの空間になるのである。ここで見のがしてならないのは、壁によって空間を継起的に、段階的に「構成すること」よりも、バルダキンによる根源的な、いわば一回的な「空間形成」に建築的構想の中心が移動しているとするゼーデルマイヤの指摘である。しかも後者のような「空間形成」に関して、かれは次のように注釈している。「このような形態関係は芸術的なものではあるが、しかし文字通りにもあてはまる場合がある。ハギア・ソフィア(図5)においては、はじめにバルダキン脚柱とバルダキン・アーチが築き上げられ、つぎによりやく充填壁がその下に差し入れられた」。したがって、「バルダキンの支柱は、垂直に境界づける空間の『皮』のあいだに骨のように刺し込まれている」。(93)

この「壁のなかへ包摂するバルダキン・システム」²⁵が「主導観念」(Leitgedanke)となり、それに従って、ハギア・ソフィア、聖使徒教会堂、聖ヨハネ教会堂、聖セルギオス・聖パコス聖堂、サン・ヴィターレ、ハギア・エイレーネのような「ユスティニアヌス建築の代表作」が生みだされた。(93)

ハギア・ソフィアの側面壁にみられるのは図1-5の「範例」である(ただし、「巨大なものに拡大されて」適用され、「一階の代わりに複数階が包摂されている」が)。「この範例は、ヴォールトが架けられる空間にも適用可能な、より一般的な構造原理が平面的に現われるしかたをもっとも単純な形態で示している」。そこでゼーデルマイヤは、「一般の原理を『包摂的形態』とよび、その壁としての現象を『包摂的アーケード』、空間としての現象を『包摂的バルダキン』とよぶ」ことを提案する。さいごの「包摂的バルダキンは中世特有の形式」²⁶とされる。(94)

ところで、この「包摂的形態」の起源について、ゼーデルマイヤは若干の考察をしている。まず、包摂的アーケードは、「6世紀の20年代のもの」と推定される聖セルギオス・聖パコス聖堂以前では、年代の確定された例はただひとつもない」ので、それはいわば「新しい建築構成的地層の示準化石」とみなされる。また、「中・後期ローマ時代の皇帝宮殿や皇帝浴場」(図4参照)において、「包摂的バルダキンの先行形態とみなしてよい例はまれではない」が、これらの例においては「『充填壁』がバルダキン支柱と同じくらいの厚さをもつため、包摂的バルダキンという印象が純粋に表現されていない」という。それは、「のちにロマネスク建築においてバルダキン支柱が壁のたんなる前方への突出(Vorsprung)のようにみえるのと似ており、しかも、「大部分の例において、充填壁の水平の成層(Schichtung)とバルダキン支柱の垂直の貫通(Durchgreifen)との対比が形づくられていない」。さらに、ローマ古代とユスティニアヌス帝期とのいまひとつの相違点は、前者の例はすべて「交差ヴォールトで覆われており」、後者のバルダキンは「クーボラ・バルダキン」だということである。起源に関しては、「クーボラ・バルダキンは西方にも存在したのか、あるいはそれは小アジアの革新を示すのか」という問題が残るが、いずれにしても、「壁のなかへ包摂するクーボラ・バルダキンをもつメリエムリクの階上廊付き教会堂(5世紀後半)の構造においてはじめてユスティニアヌス帝期のシステムの真の先行形態が発見された」という。(111-114)

5. ユスティニアヌス建築の革新性

ゼーデルマイヤによると、ユスティニアヌス帝期に新たに造りだされたバルダキン・システムは古代のそれと「奥深いところで異なる」という。かれはヘーゲルの用語(「止揚する」*aufheben*)を「建築構成的」な文脈に移し替え、「具体的に目に見える」しかたで次のように説明する。

古代を否定するのではなく、「言葉の二重の意味で古代的なるものを取りのけておく(*aufheben*)。すなわち、(a) 新たな包括的な中世のシステムのなかへ

それを保存するという意味で、それを取りのけておく、しかも、(b) それを非自立的な構成要素としてのみ、あるいは従属的な箇所にはのみ、放置し通用させるという意味で、それを取りのけておく」。(106)

まず「空間プロポーション」²⁷はどのように「取りのけておかれる(止揚される)」のだろうか。「空間プロポーションは、いわば物質的にはまだ古代のものであるが、形態的にはまったく非古代的なしかたで捉えられている」(98)。「ユスティニアヌス帝期の宗教建築は(...)、—— 物質的に(傍点筆者) —— 古代の空間プロポーションを保存する、すなわちそのバルダキンの包摂される充填壁のなかに古代の『オーダー』を保存するが、しかし古代的形態に含まれる個々のオーダーではなく、人間とのアナロジーを有するプロポーション(傍点筆者)というそのもっとも本質的な意味でのオーダーを保存する。そしてハギア・ソフィアは、それ自体がユスティニアヌス帝期のシステムに現われる新しい本質的な観念のすべてを総合するものだが、側廊の階上廊(Galerie)[図6参照]という従属的な空間において、独立円柱型支柱と被覆仕切り壁をもつ古代的なバルダキン・システムさえもそのまま保存する」。(107)

しかし、この「空間プロポーション」は、「形態的には異なるしかたで、つまり非シュンメトリア的に捉えられている」(傍点筆者)(107)。つまり、「古代のオーダーや柱間にあったようなプロポーションの尺度媒体(Träger)が明確に定められておらず」、「構築部分のシュンメトリア²⁸は部分相互間の尺度比較可能性と理解されるが、中世建築にはこれがまったく欠けているのである。ハギア・ソフィアのバルダキン支柱は、そのプロポーションをそれに従って判定できるような基本尺度をどこにも示していない。それらの支柱は(...)線に還元されている」(98)。

つぎに「オーダー円柱」をみると、「古代的円柱は孤立した軀体として通用せず——すでにコンスタンティヌスのキリスト教的古代におけるように——それが含まれる純粋な面の構成要素として許容されるにすぎない」。たとえばハギア・ソフィアでは、「階上廊の古代的バルダキンは、(...)もともと皇帝宮殿に属する、したがってより世俗的な領域に属する箇所に現われる」。そういう意味で教会堂においては、「ナルテックスのようなところで、古代的な円柱・バルダキンが中世ビザンティン建築の盛期にいたるまで保持される」²⁹。(107)

このようにユスティニアヌス建築は、盛期古代のモチーフを「取りのけておく」だけでなく、初期キリスト教的古代の「主導モチーフ」である「純粋な面」をも「従属的な構成要素」として継承する。したがって、「ユスティニアヌス帝期の包摂的バルダキンが生成するのは、古代の軀体的なバルダキン支柱がいまや純粋な面からのみ構成されるため、包摂される形態と包摂する形態が、取りのけておかれる形態と取りのけておく形態が、より高次の一体性へと合体することができること、まさにこれによってなのである。しかし、水平の分割をもつ一体的な純粋な面は、それ自体で存立するのではなく、ある意味でそれに先立って存在し、それを上部から基礎まで貫通するバルダキンの充填として存立する。古代的な意味でまだ『自然で当たりまえ』(natürlich)であった初期キリスト教的古代のシステムが、比べものにならないくらいもっと複雑な中世の形態位階制(Formenhierarchie)のなかの非自立的な部分となる」(傍点筆者)。(107-108)

したがって、ゼーデルマイヤはユスティニアヌス帝期のシステムの「卓越した業績」と「建築の世界史におけるその『唯一無比の』地位」が、「以前からの建築構成的システムのあれほど多くの具体的に目に見える価値を、ひとつの新しい主導観念のもとに有機的に結合し、位階的に秩序化し包摂するという能力に存する」とみなす。それは「かつて出現したもので最も包括的なシステム」であり、「13世紀の盛期ゴシックの建築システムは、それには及ばないけれども、比較される」という。(107-108)

かれは、ユスティニアヌス帝期のバルダキン・システムを「技術的な意味でも

時代を画する革新」とみなす。「古代の大部分のバルダキン建造物において、『人工的一枚岩』(“monolithe artificiel”)(シュワジー)としてのマッシヴなバルダキン天井は、それが覆う空間の高壁とその背後にある諸空間とによる不規則な控えによって支持される」が、「明確に組織化され、隠されていない控えシステムによって支持されるマクセンティウスのバシリカにおいてさえ、審美的印象においてはバルダキンを支えているようにみえる円柱は、技術的編成(Verband)においては機能のないものである」。それに対して、ユスティニアヌス建築においては、「構造組織の個々の部分の技術的機能の分析を好む傾向」が本質的にあり、その結果として、「上位の骨組みと充填的器官とに構造を分離すること」が生じる。したがって、「芸術的に第一義的な構成要素であるバルダキンとアーケードが技術的にも第一義的であり、包摂される充填壁が技術的にも芸術的にも二次的である」。このように「技術的システムと芸術的システムが一致する」ということが、ゴシックのシステムと同様に、ユスティニアヌス帝期のシステムの「すばらしいところであり、ある意味で格別の満足を与えるゆえんである」。(109-110)

ただし、このような「一致は完全ではない」という。というのは、たとえばハギア・ソフィアにおいては、「バルダキン・アーチのあいだの三角小間」は、「技術的にみれば充填であるが、芸術的にはそのようなものとして特徴づけられていない」。クーボラそのものも、「審美的にみれば、一体的な球面のような印象をあたえるが、しかし技術的にはリブと充填的三角小間とに分解される」。(110)

6. 「包摂的バルダキン」の生成

ゼーデルマイヤは、「バルダキン原理」の起源は定かではないとしながらも、「おそらく1世紀半ばから、この原理は『バルダキン・システム』という首尾一貫して展開される建築構成的システムの主導観念(Leitidee)になり」、「このシステムの発展は、同じ画期的時代に浸透し始めた新しい壁の捉え方と密接に関連する」と考える。すなわち、「壁から引っぱり出され、その前面に蛇腹をまわされた(vorgekröpft)個々の円柱がヴォールトの支柱になり、ヴォールトと結合してバルダキンになる」。かれによると、バルダキン・システムの生成に関して、ヴィラ・アドリアーナにおいて(図3のⅦとⅨを比較)その「生成過程をきわめて簡潔明瞭に追跡できる」という。というのは、『テンブルム・セプトールム』[テンピオ・ディ・シエーベ]では、円柱は中期ローマの壁型(3a)に従って壁の前に立っているが、しかし傘形クーボラが依然として壁の上ののっている」のに対して、ピアッツァ・ドーロの玄関の間(ウェスティブルム)では、「ヴォールトはまさにこのような、前面に蛇腹をまわされた円柱によって支えられている、つまり八脚バルダキンが壁のあいだに立っている」からである。(89-90)

このように「中期ローマの画期的時代」には、「バルダキン・システムの観念」が「建築構成的表象のいわば二つの様相のもとに現われる」。すなわち、(a)「発達した芸術的バルダキン・システムが現われるが、しかし技術的構造は依然として旧来のものである」、(b)「建築構造をそのさまざまな機能に従って分解する大胆な技術的システムが現われるが、しかし依然として天井と壁という旧来の捉え方に従って仮装される」。のちに、つまりユスティニアヌス帝期にはじめて、「技術的システムを芸術的なシステムに発展させ」、「バルダキン・モチーフの技術的機能と芸術的機能とをひとつにまとめる」ような包摂的バルダキン・システムが生まれる。最初にこのユスティニアヌス帝期のシステムで建てられた建物が聖セルギオス・聖パッコス聖堂³⁰である。(116)

聖セルギオス・聖パッコス聖堂(図3-11, XI 参照)では、「(a) 八角形の平滑な側面は、新しい捉え方に従って均質ではなく、包摂する大きな脚柱アーチと包摂される充填面とで構成されるが、充填面はわずかに後退し、透かされ、二層に構築されており、(b) この充填面が包摂する形態から独立しているの、そ

の形状は——外に張り出したり、平らなままであったりして——変化することができる」。しかし、「のちにハギア・ソフィアにおけるように、包摂する形態は垂直に貫き通り、充填壁は水平に層状に重ねられる」ということが、ここではまだそれほど明確に表現されてはいない。つまり、ハギア・ソフィアでは、二層のアーケードのアーチは上下で一致していないのである(傍点筆者)。聖セルギオス・聖パッコス聖堂では、「のちのサン・ヴィターレにおけるように、上の階の各円柱が下の階の各円柱に対応するだけでなく、下の円柱列が水平なアーキトレヴを支えているために、下の円柱がそれぞれに対応する上の円柱に直接的に継続する。しかしその反面、バルダキン支柱をのり越えて蛇腹をめぐるような彫塑の性格の強いアーキトレヴによって層が分離されるために、水平の遮断(Unterbrechung)がハギア・ソフィアにおけるよりもはるかに強められている」。したがって、「包摂的形態の適用は原理的には完全に意識されているが、それを徹底して実行するにはまだ模索的であり、確信的ではない」と、ゼーデルマイヤは結論する。(117-118)

さらに、ハギア・ソフィアとそれと同時代の聖使徒教会堂とを比較すると、前者は『バルダキン』という主題による壮大な変奏曲であり、「46ものさまざまな型のバルダキンから成り立っており」(118)、その「中心観念には可変性(Variabilität)がある」が、後者には「それが欠けている」(120)。アンドレアデス³¹の分析を参考にしながらゼーデルマイヤが要約した比較対照を表にまとめると、以下ようになるが、それにもかかわらず、この両者は「互いに補完しあっている」とする。

	ハギア・ソフィア	聖使徒教会堂
象徴性	父なる神、神的基本原理である浄智の聖堂	子なる神、神の位格の聖堂
形態の特徴	非完結的、流動的	完結的、閉鎖的
主バルダキンの支柱	「線」	「軀体的な脚柱」
控え壁	「外にむき出しになっている」	内部に「引こめられている」

7. 「主導モチーフ」、「主導観念」

ゼーデルマイヤは、聖セルギオス・聖パッコスからハギア・ソフィアへの発展は「同じ人間の思考において展開されたとしか考えられないとして、前者を後者にかかわった建築家の一人であるトラレスのアンテミオスの「初期の作」とみなす。かれはその理由を説明するために、「包摂的バルダキン」がそのひとつであるような「主導モチーフ」あるいは「主導観念」という概念を用いてその独自の芸術史観を提唱する。(121)

「建築構成システムは、あるひとつのモチーフ(あるいは複数のモチーフが寄り集まってひとつになったもの)が普遍的に通用する、つまり所与のさまざまな建築テーマにたいして一般的に適用可能だ、と認められた時点で生成する」。(ゼーデルマイヤが列挙する「建築テーマ」は「円形、八角形、三つ葉形、四つ葉形、交差空間、二重アプス空間など」である。)³²「それまで別の諸形態のもとで孤立していたモチーフの背後に、いまや突如として、思いもかけなかった造形の見通しがぱっとひらかれる。その時まで形態としてただそこにあるだけであったものが、いまや実効力のあるもの、『動かすもの(movens)』『モチーフ(動機)』となる」。そしてこの新しいモチーフが従来からの建築テーマに適用され、それを次から次へと変形していく。「しばしば、根強く継続されてきた建築テーマの連続性がかき消される」ことが起きる。こうして「新しい造形がぞくぞくと生みだされる」ようになるのが、「新しい観念の生産力の最盛期」である。(123)

ところで、「建築テーマは一般的に、先行するシステムによる建造物によって

与えられており、そのシステムが新しいシステムに引き継がれる」。逆の見方をすれば、「新しいシステムは一般的に建築テーマを、それが直前のシステムによって維持された状態で捉える」。したがって、さまざまなシステムを通して存

続するような、いわば『永遠の』建築テーマ』がありうる。(123)

しかし新旧の交代の際に、「新しい原理はたんに変化させる力としてだけでなく、『篩い(濾過器)』のように選り分ける力として、また速くに押しやられた

図1 壁造形の諸タイプ

1~7 単層の壁ベイの比較図

IV~II 多層の壁ベイの比較図

図3 壁とヴォールトー 充填ニッチのある八角形平面の比較図

(上:断面図、下:平面図) 8, VIII テンピオ・ディ・シエーペ、9, IX ピアツツ・ドーロ 玄関の間、10, X ハギア・ソフィア 洗礼堂、11, XI 聖セルギオス・聖バックス

図5 ハギア・ソフィア

図6 ハギア・ソフィア 階上廊

図2 アテネのハドリアヌスの図書館

図4 カラカッ帝浴場のフリギダリウム

図7 エフェソスの聖ヨハネ教会堂

テーマを(それがともかく視界(Gesichtskreis)³²にあるかぎり)『磁石』のように引き寄せる力としても働く。ある新しいシステムの主導モチーフからみると、新しい造形的可能性にとって親和力のあるテーマと、主導モチーフに対して抵抗するテーマとが存在する。ある新しいシステムの創出を実現するような激しい変動は、たんに個々の受け継がれたテーマの形を変革すること(Umbildung)だけにとどまらず、テーマの在庫全体の価値を変革すること(Umwertung)にある。つまりテーマのうち、あるものはそれまでよりも造形の中心に引き寄せられ、あるものは周辺に押しやられ、あるものは直前のシステムから濾し取られ、あるものはさらに以前のシステムからふたたび拾い上げられる」(傍点筆者)。(124)

その一例として、「初期キリスト教の〔ギリシャ〕十字形のバシリカという建築テーマ(たとえばサロナに残っているようなもの)は、包摂的パルダキンというモチーフによってエフェソスの聖ヨハネ教会堂(図7参照)や聖使徒教会堂の主要形態をなすようなひとつの造形に変形させたとみなされる。また、「観念がどのように発展するかをこのように理解することによって、多くの場合、代表的建物が残っていないような造形型を解明できることがある」。

しかし新しい観念やシステムの展開の「可能性」を理解することは、「消滅した造形型をとり戻すことがまれにあるということよりも、芸術史的画期的時代を評価することによってはるかに意義がある」と、ゼーデルマイヤは考える。つまり「具体的な歴史的現実において実際に成就されたことについての評価にとって不可欠な地としての裏箔(背景)(Folie)が存在するということである³³。観念に抗して、あるいは観念に即して、別の種類のさまざまな力が働いており、それらの力は観念の展開を促進したり、阻止したり、あるいは速めたり、遅らせたり、あるいはまた、さまざまなしかたでゆがめたり、彩ったりする」。たとえば、「集中式の空間形態を優遇するほうへみずから迫るような観念が、長軸式の礼拝空間を要求する宗教的状況と衝突することがある」。したがって、「それぞれの建築構成的システムの具現は、決められた建築課題に結びついているので、新しい観念の内的傾向と、建築課題、したがって建築機会を提供する現実の勢力の要求とのあいだの対立(あるいは一致)によって決定される」。(125)

ところで、「あるひとつの生成するシステムがどのように展開するかを制作の観点から洞察することは、具体的・歴史的な方法を確立するために不可欠である。しかしながら、新しい基本形態、『可能な』造形を具体的に目に見えるように導きだすことは、せいぜいのところ、受け継がれてきた形態テーマを用いて新しい主導モチーフによって一義的に決定された骨組みをもつような造形の場合でしか成功しない」。それはいわば「中間階層」に属する作品の場合であり、それに対して、「基本構造さえ導き出せないような個別的大作が存在する」。そのような作品にとっては、「主導観念そのものがそれに含まれるさまざまな可能性とともにふたたび造形のための材料でしかないのである」。ユスティニアヌス帝期という「画期的時代」に関しては、ハギア・ソフィアがこのような「個別的大作」に相当する。(125-126)

このハギア・ソフィアには「さまざまに異なるシステムのパルダキン」が含まれているが、「混成されている」(hybrid)のではない。「それらのパルダキンの構成(Gefüge)は、システムそのものと同様に、支配的な主導観念に首尾一貫して統括されており、主導観念はそれ自体システムから導きだされたのではあるが、しかし解釈し直されている(umgedeutet)³⁴」(傍点筆者)。したがって、「包摂的パルダキンは、システムの独占的形態ではあるが、ここではきわめて多様なパルダキンからなる、おどろくほど多くの等級に分けられたひとつの位階秩序のなかの支配的な形態(主空間のモチーフ)にすぎない」(傍点筆者)。このように、「個々の芸術作品は、システムのもつさまざまな観念に由来するときにも、そのシステムにたいしてなおかぎりがなく大きな自由度をもっている」。それゆえ、「建築の歴史をたんなるシステムの歴史とはけって記述されえない」³⁵。そのうえ、

「新しいシステムの段階」に入っても、「『永遠の』観念」や「観念どうしの衝突」がくり返されることがある。(126-127)

8. 古代と西欧盛期中世をつなぐユスティニアヌス建築

8.1. プロポーション

ユスティニアヌス帝期の建築では、「空間プロポーションはいわば物質的には依然として古代的なもののだが、形態的には非古代的なしかたで捉えられている」。というのは、「古代のオーダーや柱間にあったようなプロポーションの尺度媒体が明確に定められていない」ために、「構築部分のシュンメトリアが(...)まったく欠けている」という意味で、この建築は中世建築に属する。「ハギア・ソフィアのパルダキン支柱は、そのプロポーションをそれに従って判定できるような基本尺度をどこにも示していない。それらの支柱は(...)線に還元されている。しかし、聖使徒教会堂の目に見えるマツングな脚柱も、古代の意味でプロポーションを相互に転写する(Aufeinander-Abtragen)ための基礎となっていない。そして、これらの規格化された基本関係が欠けているために、原則的に形態結合の変異性があり、それは古代にとってはゆがみと見えたとちがいない。ユスティニアヌス帝期には、これはむしろ従属的な箇所に現われる。盛期中世では、この『ゆがみ』が印象の中核をなしている」(傍点筆者)(98)。

「盛期中世」、すなわちゴシックの建築では、「プロポーションの割付けを還元すべき基本尺度が提供されていないだけでなく、それがもっているプロポーションにもとづいて判断されるべき建物部分が一体的な眺め(Anblick)を奪われている」。つまり、教会堂の「高壁は、断面もそうであるように、一体的な見通し可能性を奪われている」。しかし、「ある種のプロポーション」が、「隠されており」、「直接眺めて見きわめることはできない」が、「周到に構想され」ており、「あどて測ったり、あるいは抽象的な立面・断面図を観察したりしてはじめてあばかれる」。したがって、「間隔の狭い高壁の並列はみずから、(...)客観的に存立するプロポーションを判断から奪い取り、プロポーションを捉えたいと願うまなざしは、上方へ引きずられ、『捉えられぬもの』へ没入する」。ゼーデルマイヤはこのような原理を「遠ざかる、『逃走する』プロポーション」とよび、そこにこそ「間隔の狭い高壁の並列」の「動機」があるとみなす。(99)

以上、古代、ユスティニアヌス帝期、盛期中世それぞれのプロポーションの性格を以下のような表にまとめると、「古代と中世をかすがいで緊結するような、ユスティニアヌス建築の二重の立場」(傍点筆者)(99)がいつそう明瞭となる。

古代	シュンメトリア的	目に見える(schaubar)、 明示的(manifest)
ユスティニアヌス帝期	非シュンメトリア的	具体的に目で見ることができる (anschaulich)
盛期中世	非シュンメトリア的	逃走的(fliehend)

8.2. パルダキン支柱

パルダキン支柱の構造的特徴は、「パルダキン天井とパルダキン支柱の結びつきと、個々のパルダキンと全体空間の結びつき、という二つの異なった結合関係」(101)からみなければならないが、パルダキン支柱においてもユスティニアヌス建築に特有な「二重の立場」(99)が認められる。

「ユスティニアヌス帝期のパルダキン天井[上方の遮蔽]は、切断すればとり外し可能な一体的な蓋状の殻(Deckelschale)としてパルダキン・アーチの上ののっており、依然としてやや古代的静止状態にある(559年からの改築後のハギア・ソフィア)。しかし、支柱と三角小間とクーポラはすべて純粋な面で形づくられるので、古代とはまったく異なり、上と下のあいだに継ぎ目がない」(101-102)。

いっぽう西欧では、まず「ロマネスクにおいて、パルダキン天井が中期ローマのパルダキン・システムのように交差ヴォールトになっているところでもやはり

『添え柱』が横断アーチと壁付きアーチのほうに曲がり、バルダキン・ヴォールトの区域(ゾーン)のなかまで達しているために、上下の継ぎ目のあるような「古代的關係は現われない(例はマリア・ラーハ)」。これは盛期ロマネスクとゴシックにも当てはまる。しかしながら、ゴシックのバルダキン支柱は、極端場合には、柱身がそがれて線的になるが、けっしてハギア・ソフィアにおけるように躯体を欠く線になることはない」³⁶。(101-102)

8.3. 充填壁とバルダキン支柱

ユスティニアヌス帝期の建築の充填壁は、「原則的にはキリスト教古代の『エーテル的な壁』とよく似ているようにみえ、(...)薄く、透明で、彩られている」。そしてそのような壁のなかにとり込まれた円柱については、「それ自身のなかに潜在的に古代の円柱を含むが、ただし非マッシヴで、見せかけの躯体をもつ要素としてである。平面全体と比較すると小さな柱身に、それが立っている壁のわずかな厚さが読みとれる。このことは古代の建物ではコンパクトな躯体であったような同じような円柱を、たとえ絶対的には巨大であっても、矮小で、脆弱で、非自立的であるように見えさせる」。そして「壁は空間的な明と暗の裏箔で裏打ちされる——下に暗、上に明というように(『パシカの原理』)。そして最終的に壁は、構造的性質をそれから奪うような大理石板またはモザイクでできた皮膚のように薄い化粧張りをかぶせられる。それはアンドレアデスが記述したような意味で『隔膜』³⁷である」。

したがって、「バルダキンは剛性の構造のいわば骨組みを形成し、充填壁は柔軟で流動的であり、(...)あるときは平滑で、あるときはニッチ(壁龕)となって、皮膜(Membrane)のように外側に膨らまされる。(...)ニッチが丸くくぼむことは、剛性的枠組みと弾性的充填との対比[コントラスト]のために、なにか動的なものと扱えられる。(...)したがって、ユスティニアヌス帝期のシステムの基本観念のなかには、包摂される形態を、それに含まれる形態とともに、動的に解釈する可能性がある」。(103)

さらにゼーデルマイヤは、コンスタンティノポリスの建物が「ヘレニズムの壮麗なヴィラのように水辺やピロティ上に水中にさえ建てられることがまれでなく、[水面上の]反映が審美的価値として当時の人びとには感じられており」、そのような建物においては、「あくまでも空間的媒体と捉えられ造形される光が演じる独特な役割、そして形態を溶解する曖昧模糊とした反射が特徴的である」として、光の「反射」と「エーテル的な壁」との相関性を指摘する。(130)

ところで、充填壁とバルダキン支柱との関係は西欧ではのちにどのような展開をみせるのだろうか。

まず、ロマネスク建築においては、「重ねて貼りつけられた壁の被膜³⁸」とその最前面にある分節材とをもつ「厚く、マッシヴで、コンパクトな壁」という、「ロマネスク特有の壁の捉え方がロマネスクのバルダキン・システムより古くからあり」、「壁が優勢である」。そのため、「壁が<第一義的>構成要素で、バルダキンがあとから補足してそのあいだにはめ込まれたような印象を与えることが多いが、しかし古代の範例とは異なり、ここでもバルダキン支柱はつねに壁と不可分に緊密につながり合っている」。したがって、このように添え柱のような「彫塑的な分節材」が「壁から分離される」段階を前提として、次の段階、すなわち「添え柱がヴォールトのリブによって向かい側の添え柱と、壁の場合と同じように、密接な結合に入るときにはじめて、最初のロマネスクのバルダキンが生成する」(傍点筆者)。(104)

ゴシックの充填壁については、ゼーデルマイヤはヤンツェンの「ディアファーンな構造」³⁹に依拠するが、「ゴシックの空間システム」のかれの定義は「ディアファーンな格子壁をもつバルダキン・システム」である。ところで、「バルダキンと充填壁との結合」についてみると、ゴシックのシステムでは「バルダキン支柱がすべて床からそびえ立っていたり、それらが同じアーケード脚柱から立ち上

がっていたり、あるいは支柱付きのバルダキンが高壁のあいだでいわば自由に浮遊することがある」のに対して、ユスティニアヌス帝期のシステムでは「バルダキン支柱はつねに床までとどいている」。(105)

それでもなお、「バルダキンと充填壁の関係」は、ユスティニアヌス帝期とロマネスクと13世紀のゴシックのいずれにおいても、「バルダキン支柱がバルダキンに属したり、あるいは充填壁に属したりするというように、両面価値的(ambivalent)である」(傍点筆者)。たとえば、バギア・ソフィアでは「壁コーニスが脚柱の上方に蛇腹をめぐらしている」が、両面価値的に「形態によってはバルダキン支柱の垂直の貫通が、色彩によっては水平の成層(Schichtung)が、よりよく強調される。したがって、充填壁の主要コーニスから上方にあるものすべて、つまり金モザイクでおおわれた壁の壁付きアーチおよびバルダキンのアーチと三角小間とクーボラは、光の天球、『天』である。同様に、「初期ゴシックの脚柱の『円環』(“Ring”)は水平の壁コーニスに酷似する蛇腹(Verkröpfung)である」。しかしながら、「盛期ゴシックにおいて、東ネリブがほとんど中断なく下から上へバルダキンの頂点まで貫き通るとき、バルダキン・充填壁という関係はまったく一義的になり、わたしが立てた理想の図式にもっとも近づくが、しかしさまざまな結合関係の豊かさはその分減少する」。(105-6)

9. さいごに

要するに、ゼーデルマイヤは、ユスティニアヌス建築がはじめて、帝国と教会が要求する建築課題を実現するために、異教の古代建築の技術と初期キリスト教建築の理念は継承するが、前者の規範には拘束されない構想をもって、かつキリスト教的世界観に基づき、技術と芸術が一体となった独自の様式を確立したとみなし、このような芸術的・芸術史的革新の「具体的に目に見える」形態的現象を、バルダキンの包摂的形態として、かつそれにおいて捉えている。ところで、一層の円柱列やアーケード、とりわけ多層のものを包摂するこの形態には、西欧中世にとっては決定的な意義をもつ二つの契機が、原初の均衡を保って統合されているといえよう。つまり、(1)「包摂する」ということは、そのことがすでに<包摂する/包摂される>という契機を内包しており、それが伝統的なものを革新的なものの全体へ編入するような展開の動機を生み出す、また、(2)包摂されることは、包摂されるものの<—>から<多>への発散へ必然的に向かい、無限の、しかし連続的な段階からなる位階の秩序が構想される。そこから、西欧中世において、教会堂建築に内在する「超越的なもの」の観念のひとつの壮大な再現が意図されることになる。いいかえれば、ゼーデルマイヤは、のちのゴシックにも観照する「包摂的バルダキン」という「モチーフ」を、中世のいわば芸術的なパラダイムとみなしているのである。

注

¹ この研究の最初の論文は、黒岩俊介:後期古代のキリスト教教会堂の壁システムに関するゼーデルマイヤの研究—ゼーデルマイヤの教会堂建築論1、日本建築学会計画系論文報告集 No.526, pp.265-271, 1999.12.である。なお、p.269 右段 24 と 34 行目にある「円柱列」は「円柱アーケード」の誤りであることを、この機会に訂正しておく。

² ゼーデルマイヤのいう「ユスティニアヌス建築」は概ねユスティニアヌス帝(483-565)の在位期間(527-565)に建てられた主要なキリスト教建造物、すなわちハギア・ソフィア、聖使徒教会堂、聖ヨハネ教会堂、聖セルギオス・聖バコス聖堂、サン・ヴィターレ、ハギア・エイレーネを指している。

³ Sedlmayr, Hans: Das erste Mittelalterliche Architektursystem, in Jahrbuch Kunstwissenschaftliche Forschung, 1933. Epoche und Werke I, pp.80-139 所収。表題にもなっているこの「建築システム」は、「様式」と区別するために用いられている。以下、同書からの引用は括弧内に数字のみで示し、筆者による補足や注記は[]内に表記する。なお図版は、図 2(Ward-Perkins: Roman imperial architecture, The Pelican history of art, 1983)以外は、同書からのものである。

⁴ ゼーデルマイヤは上掲書の冒頭から、「どのような意味においてユスティニアヌス帝期の建築システムを中世の建築システムとみなすことができるか」(80)という

みずからが立てた問題提起にたいして、「ユスティニアヌス帝の画期的時代(エポック)に生成した建築システムは、疑いなく中世ビザンティンの教会芸術、したがってビザンティン中世の基礎である。同様の構造をもつ建築システムは、西欧中世においても生じている」[傍点筆者](80)と応えている。

⁵ この図は「包摂的形態」の特徴を図示するためのもので、具体的に建物の参照はほとんどされていない。また、6, VI, 7, VII はロマネスクとゴシックに属するものと思われるが、著者はこれらの図には言及していない。

⁶ この強調された *vor* は、ここでは時間的に「先行する」という意味で作品の実現の時点からみて「以前」を示すだけでなく、作品の構想の段階では「前提となる表象の対象として前にある」という意味で「前」と解釈される。

⁷ *anschaulich* を「具体的に目に見える」と訳す。ゼーデルマイヤのキーワードのひとつである。

⁸ *Folie* は鏡の「裏箔」、「引き立て役」を指すが、ここでは「地となりその前にあるものを引き立てるもの」と解される。

⁹ ゲシュタルト心理学のいわゆる<図と地>というシエマをここにみることができる。ただし<図>にたいして、ゼーデルマイヤは *Gestalt* の語を用いない。むしろ、「区域」(*Zone*)のあいだでこのようなシエマが成立すると考えられている。したがって、<図と地>の関係はより空間的、彫塑的性格をおびる。のちに検討するであろうかれのゴシック大聖堂論では、三次元空間における前後、さらには上下の関係よりも、いわば意識の志向性との軸に沿っての遠近が問題となるが、そこにもこのシエマの変異をみることができる。

¹⁰ *Säulenordnung* はドリス式やイオニア式などのオーダーを指すが、ここではそういうオーダーをそなえる円柱と解する。

¹¹ ゼーデルマイヤはボンペイの壁に描かれた建築(ヴィラ・イテム)をその例として挙げている。なお、3 型はすべて図1から排除され、ほかにいっさい図版への参照はない。かれは「技術的理由から」と言うが、どういう理由か判然としない。いづれにせよ、アテネにあるハドリアヌスの図書館(図2 参照)がこの型をよく例示していると思われる。

¹² 門に関してゼーデルマイヤが挙げている例は、アンティオキア・ビシディアエの神殿域の門、ハドリアヌスのアダリアの門、同じアンティオキア・ビシディアエにある 211 年にできた門、3 世紀のアンティノエの街路門、ヴェローナのボルタ・ディ・ボルサーリ(1 世紀)である。

¹³ ゼーデルマイヤの挙げている例は、スプラトのディオクレティアヌス宮殿のボルタ・アウレアの壁である。

¹⁴ ゼーデルマイヤは「純粋な面」として「400 年頃のキリキアにあるオルバの門」を代表例として挙げている。

¹⁵ ゼーデルマイヤは指摘していないが、この壁が外部空間ではなく、内部空間の壁であることも重要だと思われる。というのは、この内外の反転は「純粋な面」の現象において背後への志向性を生みだす決定的な要因といえるからである。

¹⁶ ゼーデルマイヤはこのほかに二つの「原初的」方法を注記している(87)。そのひとつでは、「周囲を境界づける空間のまんなかに入組み入れられた躯体が上方の遮蔽を支えているが、それは、印象の上では空間を押しつけている(*verdrängen*)」。「この原理は、盛期古代からは、もはや諸室の下部構造や地下貯蔵室や地下水槽などにしか適用されなくなり、『地下的なもの』へ押し込められる」。もうひとつは、「盛期古代が全般的にそうしているように、躯体から自由になった空虚な内部空間をつくるが、しかし壁とヴォールトを原則的には区別しない。ヴォールトはいわばすでに床から始まる(『天空』の原理——ミューケナイの円蓋墓(アトレウスの宝庫のような円形墓))」。後代になっても、「ヴォールトが区別のはっきりした境界なしに壁に変わってゆくようなところ」で、この捉え方がみられるという。

¹⁷ 出典は明示されていない。

¹⁸ *Kuppel*. ドイツ語やフランス語のように(もともと、いつも厳密に区別されるわけではないが)、丸天井を「クーボラ」、丸屋根を「ドーム」とする。

¹⁹ ゼーデルマイヤはこの論文の執筆当時に一般に認められていた屋根架構説に従い、クーボラが架けられていたと考えている。しかしながら、このことはバルダキンに関するかれの結論にはそれほど影響していないようである。というのは、かれは、このクーボラについて次のように述べているからである。「包摂される充填面の場合よりもいっそうはつきりと(...)円柱列が支持ヴォールト編成のなかで力学的な働きから解放されており」、「それゆえ、円柱列はヴォールトのアーチの下でそれに従属せずに前後に湾曲できる。したがって、技術的にみれば、支持する(包摂する)骨組みと充填する(包摂される)円柱列との明瞭な分離がここにはある」。しかし、「バルダキン脚柱が見えない」ようにされ、「19 世紀にルネサンス的なファサードの背後に鉄骨で支持された構造が隠されたように、画期的な技術的革新が偽装されている」ので、「芸術的には、この前代未聞の新しいシステムにはなんら見るべきものがない」[傍点筆者]。(115-116)

²⁰ ゼーデルマイヤはこのほかにセーディア・デル・ディアヴォロのベンデンティヴドームをあげている。

²¹ 傍点は筆者による。後出(8.3.)の「両面価値的」に対応する。

²² バルダキンというのは、そのもともと単純な形式において次のように定義されている。「垂直の要素(バルダキン支柱)が多層建築の高さ全体を通して貫通しており、そのあいだで、充填するバルダキン壁だけが古代的なしかたで水平に層

状に重ね合わされる。このような造形方法では、多層建築の構成単位もまた垂直に貫通する分節材によって分離され、したがって壁のベイという形で並列する。水平の階層区分は、ひとつのベイの内部においてのみなされ、建築全体を通してはなされない」[傍点筆者](96-97)。なお、参考までにゼーデルマイヤの挙げる例を記しておく。バルダキン・システムを示す古代の例としては、エフェソスのいわゆる集会所の五つ組の方形交差ヴォールト・バルダキンとテルマエの広間の三つ組の正方形または長方形の交差ヴォールト・バルダキンがある。もっとも早い例は、ネロのテルマエのフリギダリウムで、トラヤヌス、カルカッラ、ディオクレティアヌスのテルマエがこれにつづく。4、5 世紀のキリスト教の建物では、このシステムはまれだが、エフェソスにあるユスティニアヌス帝期以前の聖ヨハネ殉教者記念聖堂には「四本の巨大な単独円柱によるバルダキン」がある。「ユスティニアヌス帝期にふたたびこの古代的バルダキン・システムの例がさらにひんばんにみられる」ようになる。*Matif* や *Dar-el-Kus* の教会堂、ミラーノのサン・ロレンツォのサンティポリート礼拝堂、そしてハギア・ソフィアの「側廊」にある「八つの矩形の古代的な円柱天井バルダキン(下では四つの交差ヴォールト、階上廊では四つのクーボラ形ヴォールト)」が言及されている。(92)

²³ カラカッラ帝のフリギダリウムの図版(図4)の参照が指示されている。

²⁴ 具体例については言及されていない。ここでは構造的な充填壁の起源の穿鑿は背景に退いている。なお、この箇所でのゼーデルマイヤの記述はゴシック建築におけるヴォールトの<リブ>の構造的機能に関する論争を想起させる。

²⁵ ゼーデルマイヤによると、ラヴェンナのギリシヤ正教洗礼堂(458 年以前)にみられるバルダキンは、二重シェルのようになった壁構造のなかで、包摂するアーケードと包摂されるアーケードの上下の関係が一貫していないので、厳密には包摂的形態ではないという。(112)

²⁶ ゼーデルマイヤは、このシステムにおいて顕在化する盛期中世、つまりゴシックの特徴を、次のように指摘している。「さまざまな盛期中世のシステムにおいて、壁のなかへ包摂することには、たしかに、きわめてさまざまな形や意味が与えられるが、しかししばしばいたるところで規範的なのは、バルダキン支柱が壁のなかへくい込んでいること(*das Hineinwachsen*)である」。(94-95)

²⁷ *Raumproportion* は幅と高さや興行きのあいだの比例的関係と解してよいだろう。

²⁸ *Kommensurabilität* は「同一尺度で測られうること」「通約性」という意味だが、ゼーデルマイヤ自身が「古代の建築論によれば、シュンメトリア」と注記しているので、ギリシヤ語のシュンメトリア(「共通尺度への約分、還元性」、「適切なプロポーション」)のドイツ語による逐語訳とみなす。

²⁹ それゆえ、ゼーデルマイヤは、「古代のモチーフの自立的な存続は世俗建築のなかにかしかりありえないと結論する(107)」。ということは、かれによれば、古代のモチーフはキリスト教の文脈のなかでいわば脱構築化されねばならなかったということであろう。

³⁰ ゼーデルマイヤの前提では、527 年以後に完成されたが、それ以前にこのシステムによる計画がなされたと考えられるので、同じシステムで 532 年に着工されたハギア・ソフィアに先行する。

³¹ *Andreades: Die Sophienkathedrale von Konstantinopel, Kunstwissenschaftliche Forschungen, I, 1931.*

³² これに関してゼーデルマイヤは次のように注記している。「したがって、精神史全般のさまざまな事実から『視界』を評価・確定することは、あるひとつの建築構成的な画期的時代の特徴を示すためにきわめて重要なことである」。(124)

³³ ここに<図と地>のシエマが、歴史的アスペクトを伴ってアナロジーの変換を経て、芸術家・設計者の表象や構想の現場に移し替えられているのが認められる。

³⁴ 前出の「価値を変革すること」*Umwertung* に対応する。

³⁵ 「システムの歴史」も、したがって必然的に様式史も、否定される。

³⁶ ゼーデルマイヤは、「1200 年代のイタリアの建築においては、バルダキン天井とその支柱の分離はきわめて強調される(フィレンツェ大聖堂)」(102)と指摘するように、この点に関してイタリアは中世においても古代的な特徴を残すとみなしている。

³⁷ *Scheidewand*. ここ以外では「仕切り壁」という訳語があたえられている。

³⁸ *Wandschicht*. ゼーデルマイヤは、高壁の構成において、前後に重ねられた壁の層(*Schicht*)と上下に重ねられた壁の層(*Geschoß*)とを、対象的にも、用語の上でも、厳密に区別している。前者には、「被膜」という訳語を当てることにする。

³⁹ *Jantzen, Hans: Über den gotischen Kirchenraum und Kunst der Gotik, Klassische Kathedralen Frankreichs, Chartres, Reims, Amiens.* ハンス・ヤンツェン:ゴシックの芸術——大聖堂の形と空間、前川道朗訳、1999 年、中央公論美術出版、105 ページ以下。

(2000 年 3 月 9 日原稿受理, 2000 年 8 月 30 日採用決定)